

## 静岡近代茶業の遺産活用と保存に関する研究 —島田市伊久美銀行と藤枝市とんがり屋根の茶商館の事例を通して—

A Study on the Use of Heritage and Preservation of Shizuoka Modern Tea Industry

内藤 旭恵                      西野 真  
Akie NAITO                  Makoto NISHINO

(平成27年10月7日受理)

明治・大正・昭和初期にかけて、世界の一等国になるべく国民が一致団結して富国強兵の名の下に邁進し、急速に近代化が進んでいった。当時、茶は生糸に次いで第二位の主産品となり、日本の産業を支えていた。

こうした中、島田市伊久美地区や藤枝市茶町周辺では、茶業を中心とした産業が興り、周辺地域では栄華を極めていた。島田市伊久美地区で栽培した茶を摘採し、峠を越え、藤枝市茶町周辺まで運び、製茶と再製を施し、横浜港から、その後清水港から海外へと輸出していた。

その頃に、島田市伊久美銀行や藤枝市とんがり屋根の茶商館が誕生した。しかしながら、栄華を極めた時代はそう長くは続かず、戦争や混乱期を経て、その多くの産業が廃業し、終焉を迎えることとなった。

栄華を極めた一時代であったが、当時を偲ばせる遺構はほとんど残っていない状況である。そこで本研究では、栄華を極めた一時代の様子を掘り起し、さらに、現在残されている関連する歴史的建造物の保存と利活用、バーチャル保存について検討した。

### はじめに

大井川流域左岸・志太地域の地場産業である緑茶生産は香り豊かな山の茶で、「玉露」、「手揉み茶」、「碾茶」、近年では「藤枝かおり」などをおこなっている。全国の茶産地のほとんどが単一品種茶ヤブキタ種による生産である。この地域における多種多様な茶生産は他の茶産地には見られない特徴であり、茶生産に関わる歴史と茶にこだわる多くの人材が様々な茶生産に取り組んでいることを示している。

この地域の茶生産の歴史は中世から始まり、大井川の東海道川越の両岸には元禄期に活躍した松尾芭蕉の茶の俳句が残されている。そして、この地域は幕末期の横浜開港時には「高級茶」の産地として、国際貿易に最も早く対応し、山間茶農家達が「グローバリゼーション」の先駆けを担うこととなった。

「安政6年、横浜の開港に際し、西野平四郎、紀州の人彦五郎を通譯となし、米人に75斤、櫃17箇を売渡したりと云う。これ本郡産茶の外国輸出の嚆矢ならん。」西野平四郎は駿州志太郡伊久美村の茶農家で、この外国商館との直接取引は近隣

山間茶農家（大井川左岸、駿州志太郡伊久美村及び周辺山村）に伝わり、江戸以外の新たな茶取引先として横浜外国商館への売り込みの為の栽培製造が拡大していく。

（静岡県精髄志太郡史・復刻版 1997年 P910）

本稿の研究は、これまで静岡近代茶業の始まりの歴史研究がほとんど行われてこなかった19世紀から20世紀初頭における大井川流域の茶業の発達過程を評価し、この歴史から静岡県の近代茶業関連構造物の保存活用の必要性を描き出し、地域ブランドの再構築に活用すべきと考える。

近代の歴史は産業の加速度的変革期であり、戦争による混乱もあり、文献史料は限定されてくる。このため郡史等の広域の地域史は全体像を正確に描き出すには難しい。特に大井川流域の左岸地域は駿州志太郡側に領地替えにより遠州側の榛原郡が存在した。支配領域が錯綜する地域を対象とした茶業発展史の記録は断片的であり、また下層農民達の茶業の取り組みの史料は少ない。このような状況の中で残された産業遺産を史料とし、近年発刊された村史や町史に注目し、地域の全体像を浮かび上がらせ、知られることの無かった流域独自の茶業発展史を考察し、残された産業遺産の活用をはかる。

大井川左岸の駿州志太郡には「向こう榛原」と云われる大井川右岸の榛原郡領地が有り幕末期から茶生産が急拡大する左岸中流域と水田地帯の下流域に存在した。志太郡史など地域近代史の中では飛び地である榛原領の歴史は記載されず幕末から近代にかけての茶業史も断片的な記載となった。

（駿河記 昭和7年 P696.697）

（島田風土記ふるさと大長・伊久美 島田市史編さん委員会 平成15年P145）

平成25年発行『図説藤枝市史』の茶業概説において近世から近代における茶生産栽培に関する記述は無く明治30年から40年代の茶流通の様子が書かれているのみである。

（図説藤枝市史 藤枝市史編さん委員会 平成25年 P120.121）

## 1. 近世における駿遠二州の茶業と全国的茶産地

### 1. 1 駿遠二州の茶業と安部茶

江戸初期、駿州安部茶は徳川家康より井川海野家が御用茶師の指定を受け、産地化が進んだ。初期は徳川家康の威光もあり、江戸でも安部茶として評判を呼んだ。しかし、寛永元年（1624年）徳川忠長が駿遠二国と甲斐を領有する時代より、御用茶（碾茶）の納入がなくなり、五代将軍綱吉の元禄元年（1624年）には御用煎茶数百貫を納めるが、江戸で販売される安部茶は次第に下級品として売られるようになる。

江戸茶商、山本加兵衛の茶価格表（文政9年1826年）において「安部茶」は下級品として表記され最も安価な煎茶として販売されている。

（藤枝茶業覚え 藤枝市経済部農林課内藤枝茶振興協議会 平成8年 P51）

この江戸初期における御用茶の茶産地の村々には「湯立て神楽」の舞いを今日まで伝えている村であると云われている。

安部茶として江戸で販売されるお茶は、安部郡と大井川中上流域で作られる茶が人や馬の背により、峠を越えて駿河府中に集まり、街道や菱垣廻船で江戸に運ばれていた。

これらの地域におけるお茶づくりは、土豪百姓ら地主達の独占的産物から、次第に小作農民や譜代下人に広がり、耕作地として使われない山の北側斜面や尾根筋、樹木下にも茶の木が植えられ、茶畑として拡大していった。

「志太郡下泉村（旧川根町）の「茶株取り調べ帳」によれば、ここは50戸位の村ですが 中略 この村の茶株所有者は合計79名におよんでいたとのことです。そして、茶株所有者が戸数より多いのは、「水呑百姓や村内有力農民の従属的立場にある譜代下人が含まれていたと考えられる」とのことですが（若林淳之「文政の茶一件の構造」「静岡県史通史編近世二」、近在からの入植も考えられる）」

（駿州地域史ノート 山本正 2008年 P147）

大井川流域山間部の村々は年貢支払いが金納でこの製茶から得られる収入が次第に大きな割合を占めていくことになる。山村における村制度は、稲作地帯と同様な支援的協同体の意識を持たせるため、村の取り決めとして支配階級である名主等の茶畑に対する茶づくりの強制があった。

明暦4年・万治元年（1658）海野弥兵衛は井川の殿と呼ばれ支配的地位にあったが駿府奉行宛に井川各村が村代（日手間）の徴収に応じないと地位保全の申し出を行っている。

（静岡県史 静岡県 平成8年 P665.666）

天明4年（1784）志太郡身成の組頭彦左衛門が、小前百姓を島田代官に茶摘みと田植えの手伝いに来ず、立て替えた借金の返済にも困っていると訴えている。

（川根町史近世資料編 第2巻 上白石実 平成6年 P135.136）

安部郡井川、蘆科地区では比較的早くから、土豪百姓、庄屋や本家に対する反発が支配者層の後退へと進んでいった。しかし、大井川中上流域では庄屋や地主層の力は次第に後退していくが限られた耕作地の分配から発生する本分家の血族的隷属関係は強く残り、流域における村々にも同様な中世的な労働慣行が残存していくこととなる。

血族的下層百姓や譜代下人達にとって、経済的自立の意識が拡大するなかで、新茶期の村代はお茶づくりの最適期を逃し、他の村から季節労働者を受け入れることもできない村掟は大きな矛盾を生むこととなっていく。この村掟が「文政の茶一件」につながっていく。

文政7年（1824年）駿遠二州113ヶ村の木元百姓達が茶株仲間の江戸茶問屋、駿府茶問屋、在方茶荷受け人を江戸勘定奉行に訴える。後にこの裁判は「文政の茶一件」と呼ばれ、文政10年（1827年）まで争われる。この裁判は茶流通におけ

る幕府制度に関わるため、奉行側も対応に手間取り原告敗訴とした。

(文政の茶一件の構造 静岡県史通史編近世二)

## 1. 2 大井川流域の村掟と茶（近世の大井川流域の村掟）

大井川流域の中上流域の村々は限られた耕作地の「穀物類」の生産と「乾し椎茸」や「茶」、「薪炭」や木材などの林産物、「川漁の加工品」を東海道の宿に販売して生活をしていった。

この村々は限られた耕作地による生活から村掟としてよそ者を入れず、村に続く道にも道標は作らず、閉鎖的な村社会を守っていた。

「農作業、特に茶の栽培は古くから行われ、川根筋の村人が換金収入を得る主産物であった。中略 山稼ぎは炭焼き、椎茸栽培など。水田耕作も行われているが、大井川下流域と比較してその耕作面積は少ない。穀物類の麦は畑地を、稗、粟、きび、蕎麦などの多くは焼畑地を使って栽培していた。」概説としてこれらの作物を島田、藤枝、岡部宿に売っていた。東海道につながる南北交通の為の山道は有るが外部者には知られていなかった。

(近世大井川流域の交流を探る 高木茂明 平成24年 P28～38)

19世紀に入ると江戸の経済は商業主義へと大きく代わり商人達の新たな富裕層が現れる。茶の需要も「抹茶」だけで無く「高級煎茶」も次第に広がり、江戸向けの煎茶が全国の各茶産地で作られるようになる。大井川中上流域の村々の煎茶も、「安部茶」として駿府府中の問屋を経由して江戸の茶問屋に販売された。価格支配を江戸と駿府の茶問屋が持ち、大井川流域の木元百姓（下層農民）達の生活は一層厳しいものになる。この不満が「文政の茶一件」（文政7年（1824年）～文政10年（1827年））と呼ばれる訴訟を駿遠二州、113ヶ村の木元百姓達が起こすこととなる。

この訴訟について先行研究があり、若林淳之「文政茶一件の構造」「静岡県史通史編近世二」では、綿作農民達の集団的訴訟が起こる時代背景の中で、駿遠二州の茶が問屋制度によって茶市場が狭められている実態と生産における山村の賦役徴収の村制度のあり方、自らの商品流通の体制づくりの必要性の教訓となったとし、さらに特権階級である藩幕体制の株仲間の持つ様々な矛盾点が浮かび上がった事件として、後の天保の改革に影響を及ぼしたことを指摘した。

上白石実「文政茶一件 駿遠茶産地の特産維持をめぐる運動」地方史研究第277号では江戸の茶流通の実態を知らない木元百姓達による訴えの矛盾点を示し、特権商人である被告株仲間の一部の組織再編成の思惑と享保の改革で江戸株仲間の再編成に及ぼした評価を上げている。

宮本勉「茶一件裁判の記録」から地域別の訴訟人身分とその偏りを俯瞰すると、大井川の東側に位置する駿州安部郡、対岸の遠州豊田郡、周智郡の村々では江戸十組問屋と他村の茶荷受人を訴えている。大井川流域の原告が訴えたのは在地株仲間で同じ村に住む茶荷受人を被告して訴えた。同じ村に住む茶荷受人を被告して訴えた地域的な偏りは113ヶ村の内、18ヶ村ありそのうち13ヶ村が大井川流域の村々である。

これは茶代金の決済方法の解決だけでは無く、木元百姓達は村の維持よりもこの流域の村々の村掟から生ずる血族的家族主義（本分家）製茶法の矛盾を江戸勘定奉行に訴えようとしたと推測される。

### 1. 3 村の生き残りと宇治製法の導入

「文政の茶一件」で流域の木元百姓達が訴えに込めた思いは9年後に確認することができる。駿州伊久美村小川の藤四郎は茶一件の被告であった。茶一件後、天保年間に入ると全国的な天候不順による凶作が続き、村の生き残りを模索する時代となっていた。

伊久美の藤四郎は天保7年（1836年）飢饉で餓死者が出る惨状の中を出府し、宇治製法の導入を図った。藤四郎は揉み切り法と碾茶法を伝えるため、大井川下流左岸の稲作百姓と近隣の有志を対象にして伝習所を設けた。藤四郎の伝習所は3年間続き、藤四郎の死後、伊久美二俣の平四郎（茶荷受人・被告人）によって引き継がれる。

「天保7年春、曩に江州より茶の種子持を持ち来りたる、伊久美の坂本藤右衛門別家、坂本藤吉出府し、偶々山城宇治郷の者に遇ひて、同地製茶の状況を聞くに及び、大に感ずる所有り、翌年4月自ら宇治に至り、その頃有名なる茶の生産家なりし、善右衛門に就て、同家の製造を主管する製茶師、又兵衛といえる者を雇い入れ、同時に数人の摘婦等も其の地より雇い来りて、小川の自宅に傳習所を設け、傳習生を募りて其の方法を傳習するに至れり。これ恐らく本県下に宇治製法の傳はりし嚆矢ならん。同11年、伊久美二俣の西野平四郎、江戸の茶問屋山本嘉兵衛に謀り、前年坂本藤吉の聘したる、又兵衛を再び招き、自宅に傳習所を開設して、煎茶・玉露及び薄茶等の製造法を傳習せしむ。」

（静岡県精髄志太郡史・復刻版 1997年 P921.922）

彼らは大井川の地勢的条件をお茶づくりに、活用することを計画した。新茶期の集約的労働の人手を確保するため、大井川下流左岸の稲作農家に茶摘みと製茶をしてもらい、茶の芽伸びとともに上流域に移動し茶づくりを行うものであった。南部の稲作百姓達は製茶技術を競い、高級茶づくりの担い手となっていく。この宇治製法の導入と公開は大井川の流域の零細な木元百姓達の家族主義製茶法を支え、更に江戸のお茶事情に合わせた高級茶づくりへの転換であった。宇治製法を広く伝える伝習所の開設で南部下流域の稲作農家が手揉み技術を習得し、この技術を持つ若者が伝道師となり新たな手揉み茶師が育ち、流域の茶生産が拡大していく。

大井川左岸流域の村々と同じ山の東側に位置する藁科川上流部の清沢地区では安政年間に志太地方の稲作地帯から教師を招いて宇治製法を習得し品質の向上を図った。

「旧幕時代の安部茶は釜炒製煎茶で黒製煎茶と云われたが、清沢村史には赤城製と称したとある。幕末天保期から宇治製即ち現在の蒸製煎茶に改められた。即ち天保八年（1837年）志太郡伊久美村の坂本藤吉が、多大の犠牲を拂って宇治製煎茶法を初めて本県に導入したのが端緒となり漸次近隣に伝わり、安政年間には清沢地区においても、志太地方より教師を招いて宇治製煎茶法を習得し、品質の



向上を図ったと記されている」

(百寿小林市蔵伝 株式会社小林市蔵商店 昭和40年 P26)

この茶一件で木元百姓達が学んだことは、「幕府の流通制度」と「江戸の茶消費事情」であった。江戸ではこの時期、幕府の商業主義経済により化政文化といわれる町人文化が高まり、煎茶も高品質化していった。天保6年(1835年)に江戸の茶商山本徳兵衛が玉露を考案し、江戸で最も高級な緑茶として評判を呼ぶ。

街道の宿場では上方や江戸のお茶事情も入りやすく、江戸や京で評判のお茶を街道筋の富裕層や文人達が求めるようになる。天保10年(1839年)藤枝宿の文人大塚荷溪の茶注文の手紙がある。

「天保十年七月十日。天気、甚だ暑く、夜になって少し清涼になる。山城國南大和広野村新田の常次郎・又兵衛がこの方に来ているとの事だ。河原町正定寺正門斜め前に住む清右衛門(山家商人)の話によると、毎年春八十八夜頃伊久美二俣へ右の茶師達が来て、宇治製法の指導をして盆後山城へ帰ると云う。(中略)彼等は今、伊久美小川村の坂本藤四郎方にいる。」

(大塚荷溪 大慶寺古文書 天保10年(1839年))

大塚荷溪は玉露の評判を聞き街道に店を構える山家商人に伝言を依頼している。

宇治製煎茶法は蒸した新芽を急速に冷やし高温の焙炉上で揉捻しながら乾燥し棒状の製茶にする製造法でこれを「宇治製法」といい、山城国宇治田原郷湯屋谷の永谷宗円によって発明されたと云われている。この製茶法は宇治周辺の村々に広がることは無かった。19世紀以降に煎じ茶から高級煎茶嗜好の高まりから大和、伊勢、紀伊などの茶産地に拡大が見られるようになる。

全国の茶産地をみると、伊久美の藤四郎の他にも宇治製法を導入しようとした人物が存在した。最も早く日向国都城の藩に仕える医師「池田貞則」が、宝暦元年(1751年)に宇治を訪れ製法を自ら習得し、都城に帰り近郷の農家に製法を伝授した(「京都府茶業百年史」1994年)。そして宝暦7年(1757年)桃園天皇に日向産の宇治製煎茶が献上されたとのことである。茨城県猿島茶産地の辺田村の名主「中山元成」が、天保5年(1834年)宇治の茶作人多田文平を招き、宇治製法を開始したと伝えられる(椎名仁・渡辺貢二「猿島茶に生きる」1977年)。駿河でも文化2年(1805年)富士郡岩松村の茶師「山崎長十郎」が焙炉を設けて茶を製したとされている(「日本茶輸出百年史」日本茶輸出組合 1959年)。中川根水川村の中村藤五郎が文政年間(1818~1830年)に宇治の彦兵衛を招き、仕上げ茶の製法を学んだ(中川根町史・近代現代通史編 平成18年)。しかし、のちの近代静岡茶業発展の素地となる藤四郎らの業績と比べると、必ずしも成功したとはいえない。

#### 1. 4 江戸への直販と横浜開港の茶売り込み

志太郡伊久美村の「坂本藤吉」(藤四郎の幼名)の死後、この事業を受け継いだ西野平四郎は茶園拡大に必要な農業資金と貿易決済に必要な近代金融の制度導入を図る。

明治14年(1881年)伊久美物産を設立、目的は「物産の公平、相互売買、産業の振興を

図る」とあり、銀行法の改正により明治20年（1887年）株式会社伊久美銀行になる。駿州志太郡下の銀行設立において伊久美物産設立は第3位に有り、茶栽培製造が拡大し、農業・商業資金充実の先進的な取り組みをしている。

「明治13年直輸出の必要を感じ、数千斤の製茶を横浜三井物産会社に託して、米国直輸出を為せり、明治14年茶業発達上金融機関の必要を感じ、伊久美物産会社を創設したるが、是れ、現在の伊久美銀行なり、後略」

（静岡県茶業史 大正15年 P1317）

幕末維新期の貿易の優良品目として「製糸業」と「製茶業」がある。明治3年（1870年）、明治7年（1874年）、明治8年（1875年）は生糸を抜いて第1位を独占する。日本製の緑茶「JAPA TEA」が外国商館の信頼を得て国際ブランド化していった時代である。明治10年の駿遠二州の製茶生産量は228万斤、宇治山城は109万斤、伊勢は105万斤で特に駿州地方における製茶金額が大きい。維新から明治10年代の茶価格はさらに高騰し、大井川流域からの製茶は予約販売になっていく。

（日本茶輸出百年史 日本茶輸出百年史編纂委員会 平成34年 P50）

## 2. 峠に響く茶摘み歌

### 2. 1 静岡独自の家族主義製茶法の創造と手揉み流派の誕生

流域独自の手揉み茶師による「移動式製茶法」は流域の零細な茶農家の家族主義的製茶を支えた。茶農家は茶の肥料となる草木の肥料を茶園に入れ、手揉み茶師とともに製茶品質を競い合った。

この競い合いは手揉み工程と焙炉の改良、燃料となる優れた木炭や和紙の製造改良などにより、高品質化していった。茶農家ごとの品質競争が広く波及し、より優れた手揉み茶製法が確立し、緑茶が高品質化していった。山間茶農家から、「お茶師さん」・「お茶摘みさん」と呼ばれ、この製茶を担い農家は茶園の整備とお茶師達との共同作業による家族主義製茶法で高級茶づくりに邁進することになる。

エマニュエル ドット（Emmanuel Todd, 1950-）のいう直系家族による権威と不平等を乗り越え、更に本分家の不平等を乗り越えた茶づくりの競い合いが生まれた。

本分家の違いは屋号が付けられ、たとえば山一西野が本家、その分家Ⅰが山二西野、分家Ⅱが山三西野と名乗り、屋号を付けた製品が競い合い、格付けされ取引された。

この製茶法の導入により全国の各茶産地には見られない、この製茶法により木元百姓達の茶摘採期に村内で起こる不満も解消された。この競い合いが茶の高級産地化に一層の磨きをかけ、その製茶技法の優位性競い、しのぎを削る中で手揉み茶流派が誕生し、茶部屋に茶揉みを請け負う流派の幟旗が立てられたのである。

横浜外国茶商館の品質による茶の評価法による取引価格は茶農家の信頼を得ることになり、この様子を聞いた山間茶農家は茶園拡大と茶園と茶草場（肥料用の草木）整備に専念した。

武士道精神を受け継いだような手揉み茶師の真剣勝負の茶づくりは技を競い合う手揉み流派が生まれることとなる。この新たな製茶法を学んだ流域の手揉み茶師は各地の手揉み茶伝導者として巣立ち、この技法は大井川流域から駿遠二州の茶産地に急速に広がり、手揉み茶の一大茶産地が形成されていった。

大井川流域の自然環境はお茶づくりに適した土壌と豊かな水量が生む川霧、高品質の木炭と和紙、さらに山間茶園の日照の短さが渋みの少ない香味豊かな流域独自の手揉み茶「もみきり」を生んだ。そして製茶に必要な焙炉和紙、薪炭、運搬用の大海（柿渋を塗った和紙の大型袋）の改良と宇治から伝わった碾茶用焙炉の改良もこの地域を理解するうえでは重要な鍵となる。

「宇治製法を改良して完成した「手揉茶」は大層な評判となり、鳳凰とか麒麟などと云う最高銘がつけられ、英国及び米国ではスパイダーレグス（蜘蛛の足）と呼ばれ、貴重品として珍重されたという。」

（藤枝茶業覚え 藤枝市経済部農林課内藤枝茶振興協議会 平成8年 P79）

優れた手揉み茶師達が育ち、苦心の成果を独占することなく、木元農民達の助け合いの精神が全国各地の茶産地に静岡製法が普及していく。このような動きが生産県の静岡から静岡製法の荒茶が集まる茶流通の仕組みができてくる。

## 2. 2 手揉み流派の真剣勝負

流域の茶農家は母屋から独立した茶部屋に焙炉を設け、茶摘み女用にツミコ部屋を用意し、普段食べることのない茶飯米と呼ばれた白米と干物なども準備して新茶期を迎えることとなる。この茶飯米の用意は山間茶農家にとって大きな負担であったという。

明治維新頃より、茶部屋では手揉み流派の幟が立てられて製茶技術を競った様である。他流派との競争もあり、製茶評価により手揉み茶師が入れ替わることもあり、その競い合いは武士達の果たし合いと同様の真剣勝負であったと云う。

高品質の製茶「もみきり」は横浜で評判を呼ぶ予約品になっていく。その後の「川根茶」ブランドとなる。品質本位の評価をする外国商館の価格付けは、茶づくりの競い合いとなり、武道と同様な手揉み製茶流派が生まれる。

「志太郡、大井川流域と瀬戸川流域、そして朝比奈川流域は、日本における手揉茶の振興と水準向上に、抜群の功績を残した地域であった。この間の経緯を述べた著書としては、大石貞男氏の「牧之原開拓史考」「手もみ技術の発達」の右に出る者はない。」

（藤枝茶業覚え 藤枝市経済部農林課内藤枝茶振興協議会 平成8年 P251）

嘉永3年（1850年）駿州六合村の江沢長作「青透流」、小笠の赤堀玉三郎は「天下一」、漢人恵助は天下一製法の改良型「青澄流」など20流派以上が旗揚げし、品質の競い合いを行った。この茶師や茶摘み女の日当は高く、明治初年江沢長作が勧進元で茶師番付表がつくられ、これを基準に日当が決められた。

（島田・金谷の茶業史展 製茶番付表 2004 P35）



静岡県における製茶手揉み技術が他府県を凌駕するまでには、碾茶用焙炉の改良と多くの茶師たちの研鑽、それを支えた各茶産地の有力者の貢献があった。

明治9年（1876年）に志太郡茶業組合が藤枝本町に設立され、この年「藤枝町の岩澤又兵衛氏が横浜から直輸出を行う。」とある。こうした志太地域を中心とする茶業の活況ぶりは、同年藤枝北部3地区の開催した「駿河国志太郡第6区3小区内・製茶検査等級表」資料4が有り、翌年の第1回国内勸業博覧会（東京上野の全国大会）の予選を兼ねていたと推測される。出品者数517戸（瀬戸谷村321戸・伊久美村153戸・稲葉村45戸）であり、主産地が伊久美村から瀬戸谷村に拡大した。

産地の茶園拡大と併せて東海道沿いに茶商が進出し、欧米に向けた茶の輸出に一層の期待が高まっていった。藤枝には大手、下伝馬の茶商人によって明治13年に、茶商共同社が設立され、委員長に「笹野徳次郎」が就任した。

多くの人材がこの流域から輩出され、山村の基幹産業になっていったのである。駿遠二州において、明治20年代末には手揉み焙炉が20万台設置されたという。

明治20年（1887年）に明治新政府は官業振興策を見直し、民間活力による新たな地方振興策を模索する。その一環として幕末維新にかけて地方における産業振興に貢献があった人材を推薦させ、表彰することで一層の産業振興に役立てようとしたのである。駿遠二州の地域独自の産業として緑茶生産に貢献があったとして駿州志太郡伊久美村小川の「坂本藤吉」（藤四郎の幼名）が農商務省大臣「黒田清隆」より追従授与証が授与されている。

山間茶業から平坦地に拡大する茶園が今日の静岡近代茶業の素地となり、手揉み茶の各工程が次第に統一され、静岡方式として明治38年（1905年）、静岡県茶業組合連合会会議所の要請に基づき手揉み製茶法の統一が図られ静岡標準製茶法になる。

当初は京都宇治地方を発祥とする手揉み製茶の技術であったが、静岡の茶業者によって、さらに高度な技へと発展し、この技術改良により煎茶特有のうまみを浸出しやすくなり、江戸時代まで茶業の先進地域であった近畿地方へ逆に導入されるまでになった。

### 2. 3 峠を越えた茶摘み女

大井川中上流部の新茶期になると西は浜松地方から東は沼津方面から茶摘み娘が茶摘みに入った。南北に通じる峠と遠州から安部川から東西に通じる峠越えで流域沿いに入るのである。

南北に通じる桧峠は藤枝市瀬戸谷上滝沢と島田市伊久美小川を結ぶ尾根道で、標高441メートルにある。昔からこの峠は藤枝町と川根地方を結ぶ山間ルート of 要所だった。ルートは「藤枝」―「上滝沢」―「坂下」―「桧峠」―「小川」―「祭文峠」―「一色」（川根町）―「阿主南寺峠」―「家山」または「地名」、「久野脇」方面に入った。明治頃までは伝統的な茶摘み歌が歌われたが昭和に入るとはやり歌が茶畑に響いたようである。安部茶の薬科川上流の村々にも志太地方から茶摘み女と共に手揉み茶師達が大勢入り込んでいた。

「“お茶は終えるしお茶摘みや帰るあとに残るは蓑と笠-”川根地方で盛んに歌われた茶摘み唄である。茶時には山間のムラムラに、平地水田地帯から大勢の茶摘み娘達が峠越えでやって来る。しかし、茶が終るとそのお茶摘みさん達の姿

も潮が引いたようにムラから消える。この歌には山の人々の淋しさがにじんである。中略

中平の大塚家で一週間程摘んでから笹間村の上河内にある岡平家へ移動して、そこでまた一週間程茶を摘む。中略 祭文峠には追い剥ぎが出るという話も聞かされた二番茶を終えて中新田へ帰ると田植えの準備から田植えの仕事が待っている。」

(藤枝市史 茶摘み娘が越えた峠―檜峠 昭和10年(1935年))

茶摘みは製品となる茶の出来具合に大きく影響するため「一芯二葉」摘みが徹底され、早く摘むための技術も要求された。茶摘み歌に『茶山茶どころ縁どころ』と歌われるように、手揉み茶の荒揉みを担当する若者や村の若者との出会いもあり、流域の茶摘みは大変な人気で、遅れてくる仲間のために遠くからでもわかる茶摘み衣装の手甲や、たすきの色を統一していた。

### 3. 士族の人材教育と製茶金融の導入

#### 3. 1 新たな産業を支える人材教育と国際貿易

横浜開港から始まる茶取引はこれまでにない利益を生むことになる。生産家においても同様に横浜居留地の外国商館も一気に急増する。「日本茶の品質は非常に高く 中略 価格も又国内相場の2倍以上で取引された」

(藤枝茶業覚え 平成8年 P67)

国際貿易で沸き立つ志太郡下では新しい時代を担う人材教育と国際貿易の情報収集が重要なテーマとなる。ここでは志太郡下における維新後の教育の取り組みについて述べる。

幕末期の民間教育は志太郡田中藩の指示も無く、志有るものが僧侶等について学ぶ寺子屋があった。ただ志太郡伊久美村小川において幕末期より私学校が開設されていた。この私学校は「楽山舎」という名前で開設され、明治7年(1874年)、村立楽山舎となっている。この村立楽山舎の教員履歴から幕臣であった「伊佐岑満」に人材教育を依頼し、明治3年(1870年)から6年(1873年)まで教育を受けた石上實蔵が採用されている。

(伊久美村史 昭和6年 P13.14)

明治維新の領地替えで志太郡を支配した人材が皆無となり、新たな田中藩城主として「高橋泥舟」が入り、「伊佐岑満」も共に移住してくる。「伊佐岑満」は幕末の三舟といわれる「勝海舟」、「高橋泥舟」、「山岡鉄舟」の書の師であったという。

伊佐は幕末期、江戸への海上航路の関所として下田奉行の実務を取り仕切る組頭で横浜開港前の「アメリカ」、「イギリス」、「ロシア」等の通商条約締結の仕事をしていた。この当時の下田港は開港前で建前として「アメリカ」や「イギリス」等の商船、軍艦に水や食料の提供だけであったが外国船の求めに応じて下田の商人達の用意する商品の輸出にも携

わっていた。このような国際貿易に関する知識を持つ人材がほとんど無い時代に伊佐は維新により徳川家達（初代静岡藩知事）とともに駿河に住まいを移し、教育者として活動を再開する。

この時伊佐は還暦を迎えていた。藤枝に転居すると伊久美村の楽山舎の求めに応じて、明治3年（1870年）から教育者として活動を始めている。楽山舎の求めに応じて、これからの時代に必要な教育者を育て、送り出している。

下田奉行所時代から教育の必要性を感じていた伊佐は地元名主の求めに応じ、寺子屋の教材として「六論衍義大意」を贈っている。国際情勢から知る庶民の教育の必要性を感じていたためであろう。

（幕臣伊佐新次郎上　ペリー来航と下田開港　2015年）

明治5年（1872年）8月の学制令により、藤枝では明治6年（1873年）志太村の為善館、明治6年（1873年）前島村の博習舎が開校する。伊佐はこれらの訓導教師として教鞭を執り、新しい時代に備えた教育振興に努力した。

伊佐は牧之原開拓団の一員であったが年齢が還暦を迎え、開拓は体力的に無理と考え、学者として漢学（支那学）と書学の教師となった。そして明治9年（1876年）に牧ノ原の開拓団長であった「中條金之助」のもとに転居をする。志太地方においてこれからの次代を担う庶民教育に対する思いから教鞭に立つ。そして明治5年（1872年）の学制令による義務教育は志太地方の人材教育、特に国際貿易に夢をかける若者達の大きな支援となり、新しい時代を迎える藤枝町が誕生した。

大正時代に静岡県から出版された『静岡県人物誌』『伊佐岑満』には明治維新から9年までの記録が書かれていない。特に静岡藩は徳川家とその幕臣が移住し、新政府は旧幕臣たちの反乱を恐れ、明治九年頃までの動向について極秘に情報を収集していた。新政府に不満を持つ士族は次第に九州に追い込まれ、明治10年（1877年）の西南の役が最後の士族反乱となった。

### 3. 2 流域の茶業拡大と商業資本の導入

明治2年（1869年）郡役所に提出した「物産取調帳」で見ると「鵜網12本（100貫800匁）・伊久美180本（1,512貫目）・身成130本（1,092貫目）・笹間上下250本（2,100貫目）・下泉50本（420貫目）・地名60本（504貫目）・笹間渡25本（210貫目）⑥1本は8貫400匁」、明治6年（1873年）の伊久美の福井久右エ門の村別取引を見ると、伊久美村小川64戸、瀬戸谷村40戸の大半と取引をしているが、小川で3人、瀬戸谷で4人が100両以上の取引で、中でも長治郎は147両の取引をしている。この他に旧笹間村、個人取引は岡野谷家の278両の記録が残る。久右エ門は仕入れたお茶を直接横浜の貿易商数軒に送り、取引金額はそれぞれ800～1,000両であった。

明治6年（1873年）に行政区分が大小区制となり、明治9年（1876年）、藤枝北部3地区の開催した「駿河国志太郡第6区3小区内・製茶検査等級表」品評会では出品者数517戸（瀬戸谷村321戸・伊久美村153戸・稲葉村45戸）で主産地が伊久美村から瀬戸谷村に拡大し、隣接する駿河国志太郡第6区12小区（身成・笹間・藤川・青部田代・桑野山・梅池・

地名)の中流域全域に茶園が拡大している。

拡大する製茶販売であったが幕末維新时期は、取引における偽金が大量流通し、特に貿易に使用された一分銀や貿易銀と呼ばれる一円銀貨は取引において多くのトラブルを生じた。

伊久美村には明治10年(1877年)初期に建てられた擬洋風建築が「伊久美公民館」として活用されている。この建物は「元伊久美銀行」で、流域の製茶金融の中心的役割を担った。昭和12年伊久美銀行の物故功労者の慰霊祭における回顧録は

「今を去る50余年を回顧するに明治維新の大業なり西南の役鎮定して年は聖業の礎石に立ちて文化更新の意気に燃ゆれども統治は西駿の山間僻地にして道路開けず、物資運送の便無く、駄馬を引き或いは人肩に汗して山を越え谷を渉りて延々四里の遠路を藤枝に出でて暫く需給取引行われて、自給自足の退嬰的舊慣生活に甘んずるの余儀な状態にして物価の標準安定せず商人に乘せられること多く購販其の均衡を欠けき混沌たる経済組織に置かれ地方主要物産たる製茶の如き其の販路は之又都市商人の壟断搾取するに委せ今にして想起せば恵まれざること甚だしき時代錯誤的昔の姿なりき。後略」

(伊久美銀行創業50年の回顧 昭和12年)

この回顧文から、明治10年(1877年)代初頭、製茶貿易の安定拡大を目指し、商業資本の導入と山村振興を意図していることがわかる。

山間茶農家達が海外貿易を拡大し銀行創設に奔走する頃、大井川右岸の牧ノ原台地では明治2年(1869年)に帰農入植した土族達の茶園開拓も10年が経っていた。流域でつくられる手揉み茶(JAPAN TEA)は幕末期より高値取引が続き、新政府の富国強兵の外貨を稼ぐ優良品として幕臣達の再就職のための製茶業としても期待された。新政府の殖産興業、土族授産事業支援を受け、模範的成木茶園の農村が誕生しているはずであった。しかし、開拓茶園の商業生産には、なお数年を必要とし、稲作を選択しなかった彼らに毎年の農業収入は無く生活は困窮を極めた。多くの開拓土族が茶園を放棄し、残る者は駿府在住の元徳川幕府関係者に支援の要請と金策に走る勝海舟らがいた。

この当時、成木茶園になるには10年を要した。山間茶園は新茶期において凍霜害を受けやすく、単年度作物のお茶を安定的に供給できる取引関係を築くには、さらに10年以上必要とした。このことから幕末期横浜開港時には茶生産が確固たるものになっていたことが伺える。しかし県下の学校では、生徒達に静岡近代茶業の始まりを「徳川幕臣達の牧ノ原茶園開拓から始まる」と紹介し、生産流通における占有率を示し、日本一の地場産業として教えている。

(県立藤枝北高校教師から聞き取り 2014年)

### 3. 3 横浜港から清水港へ

明治20年（1887年）代には、藤枝宿に進出した茶商達も大井川左岸の茶を海外に売買する程までの確固たる実力をつくり上げていたのであった。明治22年（1889年）に東海道本線の開通により、清水港の取り扱い金額は2年間で3割に激減する。鉄道貨物運賃は船便に比べて2.5倍ほど高かったが、静岡・横浜が6時間で行くという速さの違いが大きかった。

明治29年（1896年）に開港外貿易港の制度ができたのを機会に、清水港と四日市港がこの開港外貿易港に指定される。翌年には清水横浜税関支所が設置され、明治32年（1899年）国際港として形を整える。

藤枝ではすでに蜜柑などアメリカ向けの出荷が年々増加し、明治29年（1896年）に開港外貿易港の指定を受けた清水港からの直輸出振興策として、静岡県と静岡県茶業組合聯合会議所は明治34年（1901年）に製茶再生機械補助金を決め、貿易振興の資本金強化の補助金を計画し、近代化茶業の振興を図る。

この情報をいち早く知った藤枝市の議員と神戸の茶商が擬洋風建築を会社のシンボルとした藤枝製茶貿易株式会社を設立する。この建物の鬼瓦には☆印に茶の字が入っている。製茶直輸出など業とし、明治35年（1902年）3月に会社登記がされる。この会社のトンガリ屋根の建物は、会社設立の数年前に建てられ、志太地域が国際貿易に賑わう町のシンボルとして現存している。

明治30年代にはいと茶の輸出総額は2,790万斤前後の横ばいであるが直輸出金額の占める割合は10%から数年で26%に増加している。

明治34年（1901年）清水港開港と新世紀を迎え、さらなる茶業振興を祈るため藤枝茶商の有志が木町庚申堂に大型灯籠二基の内一基を寄贈した。

『藤枝茶業覚え』では「この礎石を洗い出して思い掛けずも1901年の藤枝茶商有志38名の芳名を知る」とあり、新世紀にかけた大きな思いが伝わってくる。献燈に記載された茶商の他に数十名あり、藤枝茶商は60店以上があった。この茶商の数は静岡県内茶商の半数近くを占めていた。

明治39年（1906年）5月13日、日本郵船神奈川丸が清水港から静岡茶を満載して北米に出発した。

## 4. 失われた峠に響く茶摘み歌

### 4. 1 大井川流域の近代化と失われた自然

流域の村々は幕末期から始まる家族主義製茶を基幹作物として林業および林産加工品を生業としてきた。これらの村々では新茶期になるとお茶づくりの茶師や摘み子を迎える静かな村々であった。

お茶や林産加工品の運搬は人の背や天秤棒で担がれて峠を越え東海道や沿岸航路の港から横浜港に運ばれた。20世紀に入ると地方の電力需要の急拡大を受け、水力発電開発にむけて明治42年（1909年）通信省電気局が開設される。大井川の豊かな水量はこれからの電力需要をまかなう水力発電の適地として建設計画が進められる。



明治期の藤枝町は大井川左岸の茶の集散地として流通を担っていたが水力発電開発用の鉄道計画が大井川右岸で起こる。これに対抗して藤枝町の笹野が川根電気索道を創業、大正15年（1926年）に藤枝北部の滝沢村から千頭までの索道による空中輸送が行われるが昭和14年（1939年）に廃止される。

（藤枝市史 平成25年 P185）

昭和6年（1931年）大井川鉄道の開通により沿線沿いの家並みは大きく姿をかね、駅前には商店、旅館が建ち、貨物の大量輸送はダム工事用の資材と労働者を3川根町に運び、流域経済はバブル経済となっていく。

この鉄道とダム工事による大井川流域の人口の変化は大きく4つに分けることができる。昭和10年は本川根町の人口増は湯山発電所・大間発電所・大井川発電所の建設、昭和15年は中川根町の久野脇発電所の建設、昭和30年は川根町の川口発電所の建設、昭和35年は井川の井川発電所と畑薙発電所の建設に伴う増加である。

（大井川流域の文化と電力 中部電力 2011年）

昭和10年（1935年）から始まるダム建設は31カ所となりこの取水により一時期は大井川に水が無くなり河原は砂漠化をした。これまでの水利権を巡る争いで多少の流水は取り戻せたが季節により流水のない河となった。

大井川の豊かな水量により冬は霧が立ち暖かく、この霧が直射日光を遮り、夏はさわやかな山風が吹くお茶づくりにも最適な山村であった。しかし、ダムによる取水による流水の喪失で川霧は失われ、本流沿いの茶畑は新茶期の凍霜害を受けやすくなった。しかし大井川に流れ込む支流の伊久美川や笹間川上流部の村は山里の美しい風景と茶部屋のある家並み、そして地域の特徴を持つ茶づくりを続けている。

表 1. 大井川流域人口の移り変わり（平成 7 年国勢調査）

	大井川上流域域		大井川中流域域				大井川下流域域	
	静岡市井川	本川根町	中川根町	川根町	島田市	金谷町	大井川町	吉田町
大正 9 年	4,325	5,442	7,622	6,240	38,208	13,803	12,415	11,532
大正14年	3,498	5,272	8,059	6,517	40,576	14,420	12,662	11,727
昭和 5 年	3,152	6,386	10,196	7,154	42,633	15,091	13,188	12,675
昭和10年	3,244	12,893	8,845	7,322	44,746	15,542	13,642	13,709
昭和15年	3,056	6,741	12,026	7,283	45,350	16,120	14,005	14,303
昭和22年	2,995	7,299	10,359	8,430	54,380	20,379	15,384	17,211
昭和25年	2,992	7,609	11,001	8,832	56,805	21,067	16,456	17,962
昭和30年	5,224	6,365	10,810	10,051	59,496	21,684	16,523	18,066
昭和35年	8,236	7,950	10,561	10,452	61,510	22,310	16,585	18,170
昭和40年	3,362	7,048	9,871	9,334	63,493	21,783	16,586	18,486
昭和45年	2,118	6,079	9,126	8,730	66,489	21,394	16,812	19,241
昭和50年	1,624	5,363	8,576	8,353	68,820	21,825	17,582	20,525
昭和55年	1,410	4,846	7,930	7,957	70,705	21,857	19,708	21,474
昭和60年	1,256	4,280	7,622	7,616	72,388	29,202	21,548	23,147
平成 2 年	1,055	3,985	7,141	7,291	73,810	22,050	22,022	25,147
平成 7 年	914	3,830	6,857	6,979	75,029	21,482	23,152	26,475

※静岡市井川は旧井川村、本川根町は東川根村と上川根村、中川根町は徳山村と中川根村、川根町は笹間村と下川根村、金谷町は金谷町と五和村、島田市は伊久美村と島田町と大長村と大津村と六合村と初倉村、大井川町は静浜村と相川村と吉永村、吉田町は旧吉田村の人口とした。（大井川流域の文化と電力 中部電力 2011年）

流域の主産業であった林業は戦後の植林ブームの中で流域の広葉樹の林も伐採され、杉檜の密植林になった。しかし外材の輸入による木材価格の下落により間伐もされず、日も差さない暗黒の林のまま残されている。草刈り場も無くなり、動物たちにとってもえさ場となる場所も無くなり、山里や高山地帯のお花畑に現れるようになった。

#### 4. 2 失われた地域ブランド

昭和初期から始まるダム開発は流域の村々にバブル経済をもたらした。地元雇用による農外所得の拡大は茶農家達の製茶価値を相対的に引き下げたのである。よそ者が賑わいを作り、古い村の掟も無くなり、山の生活の知恵や貧しい時代の製茶の歴史は忘れられていった。

家族主義製茶法による高品質の嗜好品としてのお茶づくりから茶園管理も草木肥料から化学肥料へと変わっていくのである。第二次世界大戦が始まり輸出茶は少なくなるが大戦後、国内経済の回復成長期にこの流域のお茶は「川根茶」の名前でブランド化に成功し国内需要が拡大していく。需要の拡大は茶園の拡大と新規参入者を加え生産も拡大し、昭和30年（1955年）代に入ると茶農協による共同製茶工場の大型化と組織化が進む。さらにFA製茶機械のライン整備が進み大型化していった。この共同製茶工場による農家の所得拡大は生葉収獲量の拡大によるものとなり、茶農協も取り扱い手数料の確保の経営へと変



図 1. 西野商店広告

化した。茶産地ブランド名は大型FA製茶機械による平準化量産品となり、「川根茶」のブランド力は大きく失われていく。

このポスターはフォーレ中川根茶名館に展示されているものである。この川根銘茶のポスターは藤枝町の製茶問屋、西野商店が昭和初期に製造配布したものである。「香味優秀川根銘茶」のタイトルが入っている。

川根茶は大井川流域の銘茶ブランドとして明治期より、特に戦後経済の高度成長期の所得拡大の中で国内向け上級茶ブランドを確立していた。この頃の川根上級茶は小型粗揉機等の個別機械による製茶機でつくられ焙炉乾燥による家族主義製茶であった。

この流域のお茶を東海道沿いの製茶問屋がブレンド加工し香味に特徴付けをして消費地問屋に卸していた。しかし昭和50年（1975年）末から60年（1985年）代にかけて地域ブランドの商標が行政地域名＋商品名による地域資源として位置づけられた。商品表示に示される住所地と

商品名の連携が地域ブランド茶としての必要条件となり、藤枝では其の地域ブランド名は登録できない。

大井川流域の総合力で築きあげた「香味優秀川根銘茶」は失われた銘茶であった。

#### 4. 3 残された近代化産業遺産

戦後の植林計画が大井川流域の山林の様相を一変させ、製茶に必要な広葉樹の炭が重油や石炭、ガスに変わり、流域林業の衰退による山の荒廃と川根茶ブランドの低迷は安定収入を失い茶農家達の生活基盤となる産業を見いだせないでいた。幕末明治期に確立した家族主義製茶法は流域でつくられた茶木の肥料、香りの良い炭、焙炉用和紙を使用した。今日の都市ガスや重油による乾燥と違い、お茶の合う香りの良い炭でつくられる手揉みのお茶はFA製茶ラインの製茶と比べ格段に香味が優れていたであろう。

大井川鉄道沿いの家並みや風景は地域固有のものは少ないが伊久美川や笹間川などの支流沿いの山村風景には、かつての日本の里山風景を色濃く残し、特に伊久美川沿いの山村風景と家並みは明治期にタイムスリップしたような生活景観を維持している。この里山の美しさと近代静岡茶の始まりとなる茶産地の歴史的建造物を持っている。山間僻地でありながら輸出用製茶資金を自ら準備活用した「元伊久美銀行」の建物残り、茶部屋から製茶工場への移り変わりを示す建物も隣接して残されている。

幕末期のお茶づくりで、横浜開港時には手揉み茶「JAPAN TEA」の国際ブランドとなり、新しく生まれ変わる明治政府の殖産興業に大きく貢献した。幕末期から明治新政府の支援も無い時代に移動式製茶による家族主義製茶を農民達が自ら組み立て、今日の近代

静岡茶の素地を築き、この山村を残された静岡近代化茶業資源として、最高級のお茶づくりの歴史とお茶づくりの体験観光地域として活用が期待される。

この大井川流域の手揉み茶が東海道沿いに運ばれ、藤枝宿が国際貿易で賑わう藤枝町に成長していった。この街道にお茶を扱う茶問屋が集積し、清水港が国際貿易港になるとき、「藤枝製茶貿易株式会社」が残されている。この建物は木造3階建ての「トンガリ屋根を持つ茶商館」として全国的にも唯一の記念碑的建物である。

「元伊久美銀行」、「トンガリ屋根を持つ茶商館」や島田市伊久美地区の古民家などは静岡近代茶業の素地をつくり、国民飲料として静岡茶の確立に大きく貢献していく無言の語り部として残すべき建築物である。この物語は産業の静岡近代化産業の起点となり、地場産業として裾野の広い産業を構築していった。

山の茶農家達の茶づくりはグローバリゼーションに積極的に反応していくための明治初めの学校教育も大きな支えになったであろう。新しい知識を持ち、大井川流域の林産物の乾し椎茸の輸出、蜜柑の輸出へと拡大していく。山村の狭い村社会から国際経済へ大きく踏み出していく物語である。このお茶づくりの物語は大井川の厳しい自然、地勢的条件を巧みに取り入れた山の民達の物語である。この物語に嗜好品としてのお茶の原点があるのかもしれない。自然に支配された山の民が自然を克服し、特産化につなげた記憶として、残された建築物や茶園を残し、語り部として活用すべきである。

## 5. 静岡近代化産業遺産の保存（動態保存とバーチャル保存）と活用

ここまでは、志太榛原地区の茶産業の繁栄と衰退の歴史を示してきたが、ここからは、こうした、長きに渡る茶業の歴史をいかにして後世に伝えていくかといったことについて論じていきたい。

また、動態保存とバーチャル保存といった考えに基づいて様々な方法による歴史や文化の保存について考えてみたい。

近年、日本建築学会や都市計画学会を中心に、歴史的建造物の動態保存に関する議論が数多くなされている。藤森や鈴木らによって、歴史的建造物の動態保存のあり方について長らく論じられてきたが、現実には厳しく、老朽化や費用対効果などの問題によって解体されることが多かった。また、保存された建造物も一部改修され、竣工当時の状態で残っているものは非常に少ない。

一方で、近年注目を集めているのが、情報処理学会や画像電子学会を中心に、歴史的建造物のバーチャル保存に関する議論が盛んになされるようになってきた。凸版印刷や池内らによって歴史的建造物をデジタル技術によって保存していこうといった議論がなされるようになってきた。歴史的建造物のバーチャル保存における一連の流れは、3Dスキャナーを用いて、三次元計測を行い、そのデータをコンピュータに取り込み、画像処理を経て、3DCG化し、外壁をより完全体に近い状態で情報保存しようとするものである。

また、凸版印刷では、凸版VRシアターにおいて、アンコールワットの再現CGや故宮の再現CGを鑑賞することができるようになっており、CG上に再現された歴史的建造物の周辺をウォークスルー形式で閲覧可能となっている。

しかしながら、歴史的建造物のバーチャル保存は、保存に用いる機材の大型化や高額な

費用がかかるため、一般には浸透していない状況である。

そこで、いかにして歴史的建造物を動態保存として残しつつ、バーチャル保存を組み合わせながら利活用していく方法について考えたい。

そこで、本研究では、歴史的建造物のデジタルアーカイブを提案する。

まずは、こうした歴史的建造物が一部でも残っているというのは、文化的・歴史的価値を島田市が認めて利活用している点を見ると評価に値するが、メンテナンスなどの費用は出ていないなどの点を見ると、積極的な保存や利活用には至っていないようだ。

また、静岡県建築士会のメンバーや東京農業大学の有志らによって、旧伊久美銀行を中心として、一体の歴史的建造物を用いて観光地化できないかといった取り組みも進められており、草の根運動的ではあるが、注目は集めるようになってきている。

そこで本研究では、リアルとヴァーチャルを融合させた利活用を提案したい。

まず、リアルの世界における利活用のメリットは、現場における空間体験ができることである。一方で、ヴァーチャルの世界における利活用のメリットは、失われてしまった部材や構造物を仮想空間上で再現し、画像合成が可能であることである。さらに、プロジェクションマッピングなどの手法を応用することで、現物の建造物に対して、失われた構造物を投射して合成することで、あたかも竣工当時の様子を見ているかのような感覚を味わうことも可能である。

こうすることによって、現物が保存されているからこそ、デジタル技術と組み合わせることで、新たな情報表現が可能となるのである。

また、デジタル技術を用いたデジタルアーカイブを構築することで、再現できなかった部分を補完することができるほか、不足情報の保存につなげることもできる。

歴史的建造物を保存し再現するためには、CG技術と写真技術も用いる必要がある。写真技術では、現在の状態を忠実に保存記録できるほか、CG再現用のテクスチャとしても利用が可能であり、多くの写真を保存することで、より細かい部分に至るまで再現を高めることができる。

CG技術では、既に撤去されている部材や、解体されてしまっている部分を再現できるほか、ウォークスルー形式で再現を行うことで、ストリートビュー形式での表現も可能である。

こうした再現を行うと、過去の歴史や当時の様子を現代に伝承し、二次的効果として、観光資源などにも応用できる情報となる。



## 5. 1 旧伊久美銀行と伊久美二俣の茶部屋と茶工場

### （美しい伊久美二俣の山村風景と茶農家の茶部屋、生産拠点と製茶金融）

島田市伊久美地区には、様々な歴史的建造物や近代産業遺産が手つかずのまま残されている。筆者も2015年7月19日と2015年9月13日の二日間に渡り、島田市伊久美二俣を訪問して実地調査を行った。

図2に示したのは、「旧伊久美銀行」である。ここは、伊久美で茶産業が盛んになり始めた明治年間に建設された歴史的建造物で、伊久美銀行廃業後も、島田信用金庫伊久美支店として利活用され、最終的には公民館になった建造物である。

しかしながら、建造物自体は残ったものの、当時の面影はほとんどなく、内部も銀行としての設備は全て撤去されており、現在では、公民館としての資材が並べられている状況である。このような状態では、当時の様子を伺い知ることは難しい。さらに、外観に目を向けると、一部改修が施されており、窓枠や正面入り口のドアは近代改装されており、明治時代の趣を失っていた。



図2. 旧伊久美銀行

## 5. 2 とんがり屋根の茶商館

(街道沿いに拡大する茶商社製茶輸出の新規参入清水港国際航路第1便のシンボル)

伊久美銀行と対を成して語られるのは、藤枝市茶町にある「とんがり屋根の茶商館」である。明治時代に、藤枝製茶貿易会部式会社の本社兼輸出茶再生工場として創業したのが始まりである。北米西海岸への茶の輸出を行うため、伊久美地区などで生産された茶葉を藤枝茶町まで運び、ここで製茶再生を行い、清水港から輸出していたのである。

その先駆けを担っていたのが、図3に示したとんがり屋根の茶商館である。本建造物は、藤枝製茶貿易会部式会社によって、20年程度利用したのちに、個人の手に移っている。図4と図5に示した資料がその根拠資料である。現在、個人宅として使用しているため、内部の調査は不可能であったが、内部に入ることができないからこそ、デジタル技術を用いてアーカイブ化しておくべきである。デジタル化することによって、建造物の全体像を把握できるほか、当時の様子と現在の状態を遷移させながら比較することもできるため、より多くの情報を含んだアーカイブとなる。



図3. とんがり屋根の茶商館

2019/9/1  
2019.09.17

史料2

藤枝製茶貿易(株)建物登記簿

(示表の物建るた主)				部 題 表		数 枚
居 宅	店 舗	①種類	家 屋 番 号	所 在		
三 木造 階 瓦葺 建	建	②構 造 木造瓦葺三階	三 式 中 一 番	藤枝市藤枝五丁目参式番地九	1	
一 階 七 七 七 六	唐階 五 五 五 五	③床 面 木造瓦葺	参式番地九	藤枝市藤枝五丁目参式番地九	2	
二 階 七 七 七 六	唐階 五 五 五 五	④床 面 木造瓦葺	参式番地九	藤枝市藤枝五丁目参式番地九	3	
三 階 七 七 七 六	唐階 五 五 五 五	⑤床 面 木造瓦葺	参式番地九	藤枝市藤枝五丁目参式番地九	4	
⑥昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日	平方メートルに書替 小 林	原因及びその日付	昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日	藤枝市藤枝五丁目参式番地九	5	
昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日	平方メートルに書替 小 林	登記の日付	昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日 昭和三十五年九月八日	藤枝市藤枝五丁目参式番地九	6	

図4. とんがり屋根の茶商館登記簿

史料3 静岡県近代遺跡調査票

近代遺跡所在調査票様式

都道府県名：静岡

分 野 ⑥ 商業	遺跡の名称 藤枝茶再製会社事務所
遺跡の所在地 藤枝市 藤枝5丁目3-26	
所有者 杉浦 れい	
遺跡の年代 明治34年 建築	
遺跡の説明	<p>地場産業製茶取引の為 貿易に係る外国 商社資の出入のあつた洋風建築物で再製工場の 一角に事務所、会議室 拜見場を備へてア階の上に 鉄板鱗葺の尖塔を設けていて一見して速に眼につく 容姿の洋式建築物である</p> <p>一ア階、二ア階共 15坪 尖塔 1.8 坪 木造 屋根 日本瓦葺 尖塔鉄板鱗葺 外部 南窓下見板張り 窓 上げ下げ石硝子戸</p>
保存の状態	外部南窓下見板張は 浪鉄板に替へられ内部 も模様替とされているが 骨格や階段廻り、窓廻 りは当時の様である
管理の状況	生活の為 内装は替えているが 建物は堅牢で 大きな損傷は無い
指定の有無	無
遺跡の評価	<p>このようなとんがり屋根の洋風建築は当時の洋風 建築として重要でありと同時に茶のまちふじえん の誕生期の記念塔と言える存在である</p>

図5. とんがり屋根の茶商館登記簿



## 6. まとめと今後の課題

本論文では、志太榛原地区の茶業の歴史とそこに点在する歴史的建造物について述べてきた。長い歴史の中では、紆余曲折あり、繁栄と衰退の歴史を辿ってきた。現代においては、限界集落と叫ばれるようになり、地元住民も都市部へと移住するようになり、新たな戦略で集落に人々を誘客できるようにならなければ、廃村になるのは時間の問題であるように考える。

こうしたあって、歴史的建造物も風化や解体の危機に直面しており、旧伊久美銀行では、老朽化や劣化の問題もあり、改修工事の必要性に迫られている。また、とんがり屋根の茶商館も、先代の所有者が他界し、解体か保存か移築かといった状況で紛糾している。

形あるものは有限であり、いずれ朽ちて無くなる運命にはあるものの、残されている間に、早い段階でデジタルアーカイブ化し、後世に様々な情報を伝えていくことも必要であろう。

茶業発展の歴史の裏側には、数多くの歴史的建造物の貢献もあったが、明治・大正年間に突発的に発生した茶貿易の流れにより、関連施設が複数の地域において建設されたていったが、第二次世界大戦勃発と共に茶貿易も中断し、その影響によって外国人茶商も帰国したため、建造物も放棄され、現在ではそのほとんどが残されていない。

特に、静岡市内に立地していたヘリア商会やアウイン商会などは、大きな茶蔵を有していたが、静岡大空襲によって大規模に破壊され、現在では、その面影も残されていない。また、当時外国人商館が建ち並んでいたはずの地を訪れても、別の茶業者の所有地となっており、栄華を極めた時代の様子を伺い知ることはできない。古き良き時代の記憶は、土を掘り返してみなければ知ることができない状況まできている。

神戸では、阪神大震災後の再開発の折に、旧居留地を掘り返したところ、静岡に移転したヘリア商会の基礎石や茶工場の床が発見されるなど、当時の状況が少しずつではあるが全貌が見えてきた。

静岡でも、そうした大規模な再開発の折には、大きな発見に遭遇する可能性もあるだろうが、まずそうしたチャンスに巡り合うことは難しい。

そこで、デジタル技術を用いて、当時の写真や竣工当時の図面などを参考にし、情報再現することによって、土の下に埋もれた過去を呼び覚まさないでも、歴史に触れることができるようにすべきである。また、そうしたデジタルアーカイブを構築することによって、観光資源としても利活用でき、地域振興や地域活性化の一役を担えるものと考えている。



【参考文献】

- [1] 明治期の静岡県志太郡 現在の大井川左岸の藤枝市、島田市、焼津市、川根町、川根本町の一部（幕末明治初期は藤枝・島田市北部は榛原郡の飛び地であった）
- [2] 天正13年（1583年）武田と今川の戦後、甲斐武田の家臣であった平内三郎が島田市伊久美の復興のため荒れ地を開墾し茶園を開き製茶を年貢として納めた。大橋家古文書
- [3] 元禄期の松尾芭蕉の詠んだ俳句が大井川左岸に「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」『甲子吟行』、右岸に「駿河路や花橘も茶の香り」『炭俵』
- [4] 静岡県茶業組合聯合会議所（1926）『静岡県茶業史』静岡県茶業組合聯合会議所
- [5] 瀬戸谷歴史の会（2012）『瀬戸谷村史・瀬戸谷の歴史』瀬戸谷歴史の会
- [6] 静岡県県史編纂（1996）『静岡県史通史編 3 近世 1』静岡県県史編纂
- [7] 川根町（1994）『川根町史 近世資料編第 2 巻』川根町
- [8] 高木茂明（2012）『近世大井川流域の交流を探る』羽衣出版
- [9] 宮本勉（2004）『茶一件裁判の記録』羽衣出版
- [10] 静岡県志太郡役所（1997）『静岡県精髓志太郡誌（復刻版）』（株）千秋社
- [11] 静岡県茶業組合聯合会議所（1926）『静岡県茶業史』静岡県茶業組合聯合会議所
- [12] 曾根俊一（1970）『百寿小林市蔵伝』（株）小林市蔵商店
- [13] 社団法人日本茶業中央会（2000）『緑茶の辞典・玉露の発明』（株）柴田書店
- [14] 大塚荷溪 大慶寺古文書
- [15] 椎名仁・渡辺貢二（1977）『猿島茶に生きる』崙書房
- [16] 日本茶輸出百年史編纂委員会編（1959）『日本茶輸出百年史』日本茶輸出組合
- [17] 中川根町編さん委員会（2006）『中川根町史・近世現代通史編』中川根町
- [18] 大石貞夫（2004）『静岡県茶産地史』（社）農山漁村文化協会
- [19] 島田市博物館（2004）『島田・金谷の茶業史展35頁製茶番付表』島田市博物館
- [20] 明治 9 年駿河國志太郡第六大区三小区内製茶検査表
- [21] 藤枝市経済部農林課内茶振興協議会（1996）『藤枝茶業覚え』藤枝市
- [22] 農商務省大臣黒田清隆（1887）『追従授与証』
- [23] 森園市二（2001）『お茶の歌々』金谷町お茶の郷博物館
- [24] 村松芳太郎（1931）『伊久美村史』朝日書店
- [25] 静岡新聞社（1991）『静岡県歴史人物伝』静岡新聞社
- [26] 島田市市史編纂委員会（2003）『島田風土記ふるさと大長・伊久美』島田市
- [27] 『伊久美銀行創業50年の回顧』昭和12年
- [28] 中部電力静岡支店大井川電力センター（2011）『大井川流域の文化と電力』中部電力
- [29] 三菱地所（2012）『三菱一号館美術館一丸の内に生まれた美術館』武田ランダムハウスジャパン
- [30] 西尾雅敏,「帝国ホテル中央玄関復原記」, 博物館明治村, 2010
- [31] 内藤旭恵・金澤航・坂井滋和（2012）「情報化の観点から見た我が国の歴史的建造物の保存と展示・公開の現状」情報処理学会第 2 回デジタルコンテンツクリエーション研究会発表論文
- [32] 横山大・加藤卓留・内藤旭恵（2012）「写真による建造物の保存に関する一考察」情報処理学会第2回デジタルコンテンツクリエーション研究会発表論文

- [33]内藤旭恵 (2012)「日本工業倶楽部光・影」日本写真芸術学会学会誌創作編
- [34]ShigetoYuki, YangRenyu, WangLe, NaitoAkie, SakaiShigekazu. (2013).  
The Research of the Way of Sharing the Roles of Creating CG by Creator's Experience Level. From the Case Study of Modeling a “Mitsubishi Ichigokan” Building. Proceedings of the 11th annual conference of Asia Digital Art and Design Association, pp.86-89.
- [35]YangRenyu, ShigetoYuki, NaitoAkie, SakaiShigekazu, SuganumaMutsumi. (2013).  
Research on restoration method of historical building by CG technology. Proceedings of the 11th annual conference of Asia Digital Art and Design Association, pp.152-153.
- [36]内藤旭恵・重藤祐紀・坂井滋和 (2014)「歴史的建造物のデジタルアーカイブにおける参照資料と再現CGのリアリティに関する研究」.『2014年度 画像電子学会第42回年次大会』画像電子学会
- [37]重藤祐紀・内藤旭恵・坂井滋和 (2014)「歴史的建造物のデジタルアーカイブ」.『2014年度 情報システム学会第10回全国大会』情報システム学会
- [38]内藤旭恵・重藤祐紀・坂井滋和 (2014)「歴史的建造物のデジタルアーカイブにおける参照資料と再現CGのリアリティを評価するための生理計測に関する研究」.『2014年度 情報システム学会第10回全国大会』情報システム学会